
プリンプタウンに飛ばされた海賊たち

歌紅夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンプタウンに飛ばされた海賊たち

【Nコード】

N2078BA

【作者名】

歌紅夜

【あらすじ】

銀河の覇者との決着がついた6人。数日たって、やっとお宝探しにでた。ナビイの占いでは、『異世界の人間に会ってくるべし』と出た。その異世界の人間の正体は…？

プロローグ

ある穏やかな日のことだった。バスコとサリーがある路上を歩いているとき、ダマラスに遭遇。ダマラスはバスコの前でこう言った。

「バスコ、お前に海賊の抹殺を命じる。」

ダマラスはバスコの首に剣を突きつける。バスコは苦い顔をして、

「嫌だと言ったら？」

…沈黙。サリーはダマラスに襲い掛かる。ダマラスはなぎ払った。

「キーツ…。」

サリーの隣にしゃがんだバスコ。ダマラスはまだ首に剣を突きつけたままだ。そして、ダマラスはこう言った。

「拒否すれば、貴様の命は無^{てめえ}い。」

バスコは、どうすることも出来ないと考えた末、

「分かりましたよ、ダマラス様。（チツ）」

小さく舌打ちをした。これが新しい事件の始まりだった。

『レッツお宝ナビゲート！』

ナビィの占い、お宝ナビゲート。宇宙最大のお宝についてナビゲー

トする。ハカセの頭に衝突し、占い結果が出た。

『異世界の人間に会ってくるべし』。こんなの出ましたけど？』

いつもの通り変な占い。5人は鎧のほうを見た。

「知りませんよ。今度は異世界ですか…？」

以前の「銀河の覇者に注意するべし」の時には、鎧の方を見て、頼ろうとした。しかし、何も答えられなかった。しかたなく、いつもの通りに町へ出ることにした。

町へ出て行つた6人のうち、ルカ・ハカセ・アム・鎧の4人は普通に街を歩いていた。ヒントになりそうなものが無い。そんななか、目の前に現れたのは…、バスコだった。初めてあつたとき以来、大いなる力に関する以外で会ったことは無い。マーベラスとジョーは今、目の前にいない。

「あれ…？マベちゃんいないの…？」

感じとしてはいつものバスコ。そしてバスコは人間体から、怪人体へと変わり、戦闘モードになった。そのときに、ハカセは
(大いなる力に関係があるのかも)

と確信した。でも、目の前には怪人体のバスコ。戦わないわけにはいかない。

「ゴッゴッカイチェンジ！！」「」「」

4人で無謀な戦いに挑んだ。バスコは今、レンジャーキーを持っていない。

「サリー。」

サリーを召喚したバスコ。

「皆さん、ここはニンジャで行きましょう!!」

と鎧はシュリケンジャーのキーを。しかしアイムたちは、別のキーを取り出した。それは何かというと…。

「……ゴークイチェンジ!!」「……」

「シュリケンジャー!!」 ゴークイシルバー

「カクレンジャ ！」 その他3人

何かとずれている。やはり合わないときは合わない。鎧はスーパー戦隊を愛する男として、ツッコミたい。でもそんな余裕が無い。

「だって、ニンジャでしょ?」

鎧の気持ちは何1つ分らない3人だった。鎧はもう、どうでも良くなったので、サリーとの戦いを始めた。

「カクレ流、大地がくれの術!」

ハカセイン・ニンジャブラック、かいしんの一撃!

「キイ……」

バスコ、舌打ち。バスコは剣を握った。

「どおおおおりゃ〜!!……」

剣を振りかざす。その時だった。上から銃弾が降ってくる。バスコにその銃弾が当たる。マーベラスとジヨーだ。

「あれ、やっと来た？マベちゃん。」

「うるせー！！てめえは黙ってる！！」

バスコは、もう一度剣を振りかざす。剣には凄い力。

「てめえ、何をする気だ。」

「ちょっと消えてもらおうかなって。じゃあ、いってらっしゃい！」

横に剣を振る。すると一気に次元の亀裂が出来、その中に6人は吸い込まれていった。

「おっさん、これでいいの？」

ビルの上に立っていた、ダマラスに聞いた。

「戻って来られないんだろうな？」

「大丈夫。戻ってきた奴1人もいないから。」

バスコは人間体に戻った。サリーをつれ、船へ戻ったバスコ。ダマラスは、アクロス・ギルに報告のため、戻っていった。

1:12、ここ異世界！？（前書き）

キャラ設定は、マーベラス〜アトムまでは同じですが、

鎧：実はゲーマーだった。

という設定でお願いします。

1：2、ここ異世界!?

「くくくくわああああ!」「」「」「」

ゴークイジャーの6人が上から降ってくる。それを見ていた、たまねぎなんだか、鬼なんだか分からない生き物がそれを見ていた

「オン!?!」

すぐさま避けようとしたその時、ハカセが謎の生命体の上に落ちて下敷きにした。その上に、マーベラス 鎧 ジョー ルカ アイムの順で落ちてきた。

「皆さん、大丈夫ですか?」

「あたしは大丈夫。でも…。まさか一番初めにハカセが落ちて行くなんてね。」

ハカセはやっと立ち上がった。その時、ジョーたちは一步步引いていった。

「え?何?」

と下を見たハカセ。何か踏んでいることにやっと気付いた。

「オン!オオオン!!(訳:おいお前、なんてことをしてくれるんだ!)」

しかし何を言いたいのかさっぱり分からない6人。

「あ、おにおんだ！」

赤い帽子をかぶった少女は謎の生命体のことを、「おにおん」と呼んだ。

「あの人たちは？」

おにおんに聞いた。

「オン？オオオオン！（あいつらか？突然上から落ちてきた。）」
その少女は、言いたいことが分かるらしい。

「え？上から？」

と、6人を見た。

「うーん。別の世界から来たとなると……。りんごとアルルの同類かな？」

いきなり訳の分からない単語を出された。鎧は1つ思い当たることがあった。

「もしかして…、君はアミティ？」

「え？何で分かるの？」

「いや…、その。マーベラスさん、ここは「ぷよぷよ」の世界です

「よ。」

「ぶよぶよ。」「ぶよ」と呼ばれる物体を同色4つ繋げて、消すことを勝負としている。

「じゃあ、ここはプリンプタウンってこと?」

「そうだよ!彼方たちは異世界の人間?」

「そう!俺は、伊狩 鎧!ちょっとした事故でこの世界に飛ばされてきたんだ。」

鎧はここに来るまでをアミティに説明した。

「へえ〜。じゃあ、この世界と似たようなゲームがあるから私たちの名前が分かるんだね。でもきつ

と…。この世界そのものが、ゲームなんだと思う。」
アミティはそう言った。5人(鎧を除く)はゲームの世界に入ってしまったということとでちょっとヒヤツとしたのだった。

「自己紹介がまだだったな。俺はマーベラスだ。」

「…。ジョーだ。」

「あたしは、ルカ!」

「私、アイルム・ド・ファミーユと申します。こちらはハカセさんです。」

アイムはハカセも同時に紹介した。

「ここに来るまでで、たぶんマーベラスたちは、ぷよを消す力がついていたと思うだ。」

説明しよう。マーベラスたち6人は、ここに来る最中に白い光を浴びた。それは、ぷよを消す力なのである。

「ぷよって、どうやって消すの?」

ハカセはアミティに聞いた。

「同じ色のぷよを4つ繋げれば消えるよ!」

「同じ色のぷよ?例えば…。この色のぷよを4つ集めればいいってこと?」

鎧は緑色のぷよを持ってきた。

「その通りだよ!」

何か別の女子来たあああああ!

1:12、ここ異世界!?(後書き)

???「僕の扱いひどいよ!」

アミティ「次に期待しよう、ね!」

2…この子も!?

「あ、アルル!?!」

「アルルって、初代ぶよぶよの主人公のアルル・ナジャ!?!」

アルルは首を傾げる。

「あ〜じゃあ、ちゃんと説明するから!」

と、アミティはさっきあったことを説明した。そして、アルルと同じように、異世界の人間だということ。

「なるほど。でも、僕とは違う世界だよ。」

「そうだよな。じゃあ、りんごに聞いてみようか。」

と、いうことで別の場所へ移動。商店街にやってきた。

「アミティとアルルと、見慣れない人たちだね。でもどっかで見たことがある気がする。」

この少女は、人名などを覚えるのが苦手だが、頭の回転は速い。

「あ、少なくとも銀のジャケットの人にはお世話になった! 鎧さんですよな。」

りんごを持った少女、りんごはそう言った。

「あ、はい。そうですね。りんごちゃんもこの世界に入っていたんだね。」

そこで、話があつているところ申し訳ない。どうやってこの世界に來たのかを説明してもらつて。

「あ、私ですか？私は…りす先輩の爆発に巻き込まれてこの世界に來たんだよ。」

と、言うわけでその、りす先輩こと、りすくま先輩に会いに行つた。

「おや、りんご君に鎧君ではないか。どうしたのかね。」

「それが、鎧さんもこの世界に飛ばされちゃつて。だから、この世界に來た過程を説明して欲しいんですけど…。」

「分かつた。では鎧君、私とぶよ勝負をしようではないか。」

「了解！レッツ！」

「ぶよ勝負といつづ。」

ここでもわけの分らない話、炸裂。

3：ヒントだよ！

対決種目はぶよぶよsun。太陽ぶよを使い消してゆく。鎧、4連鎖。りすくま先輩、4連鎖。ほぼ互角である。周りから歓声が渡っている。

「鎧君、腕を上げたようだね。」

「りすくま先輩こそ！」

マーベラスたちは鎧とりすくま先輩の戦いを眺めていた。

「ああやって戦えばいいのね。連鎖っていうのを組めば勝てる確率が上がるってことだ。」

「楽しそうですね。」
「いや、眺めている場合じゃないでしょう。」

「では、俺の最高連鎖！行ってみよう！」

8連鎖。りすくま先輩5連鎖。鎧の勝ちだ。鎧はりすくま先輩からここに来るまでどうしていたのかを聞いた。

「じゃあ、実験に失敗して気付いたら飛ばされたということですね。」

今のところ、この事件は迷宮入りの気配。

「後は…どうする？」

ルカはマーベラスに聞いた。

「しかたねえ、暫らくプリンプタウンに居座るか。」

「でも…。ガレオンが無いけど？」

ハカセは辺りを見回した。さっきは地上戦で飛ばされたので、ガレオンはない。ということは、ナビイが1人で残っているということだ。

「なら、ここからやってみるか？」

「え〜！？無理だよお、やめて置こうよ！」

ハカセはビビりながら、止めた。しかしマーベラスは、カセが止めるのを気にせず、モバイレーツに5501と打った。

「ゴ〜カイガレオン！」

6人は驚いた。まさか次元を超えてこの世界にやってくるとは。それ以上に、アルル・アミティ・りんご・りすくま先輩は驚いていた。

「あ、あれ…船ですよね？」

りんごは、幽霊とか科学的に存在しないものなのではないかと思いきりすくま先輩の影に隠れた。

「安心しろ。俺たちの船だ。」

「い、いや安心しろじゃないよ！ありえないよ！？呼び出してくるなんて！」

「あたしたちもびつくりだよ！」

アルルとルカが言い合いになっていることは置いておいて。船が来れたということは、元居た世界に帰れる可能性があるということだ。バスコがガレオンが船で時空を超えるところを見た。

「まさか！？そんなことは1度も無かったのに！？」

バスコは次元の亀裂をふさいだ。

その影響はプリンプタウンからも確認できた。

「嘘、アレじゃ戻れないよ！」

「ぶよ勝負をしながら考えることにしましょう、マーベラスさん。」

アイムは、マーベラスのほうを見た。

「そうだな。ぶよ勝負も面白そうだしな。」

ガレオンは町外れのほうで止め、この世界から抜け出すため、情報を集めながらぶよ勝負をすることにした。アイムは疑問に思ったことがあった。

「マーベラスさん、ここが異世界だとするのなら、ナビィの占いもここにあるのかもしれないよ？抜

け出す方法と同時に、大いなる力も探してみたほうが良いのではな

いでしょうか。」

そもそも、5人は大いなる力のことすら忘れていた。

「あああああああああああ！？そうか！ここは異世界だったあ！？」

宇宙海賊たちは、元の世界に帰るのと大いなる力のヒントも探し始めた。

3…ヒントだよ！（後書き）

大いなる力と関係あるのか…。次回、登場！

4：大いなる力の情報がはじめて入った！

朝になった。アイムは、商店街を歩いていた。背伸びをしながら歩いていると、後ろから、

「コ・ン・ニ・チ・ワ」

という、怪しい声。後ろに振り向いた瞬間、アイムは声をかけた人物を殴ってしまった。顔面に直撃してしまった。マーベラスなら確実に銃だった。

「す、すみません！！大丈夫ですか！？」

殴った相手は、黒い服に黒い帽子、そして飴。こういう身なりは1つ覚えがある。13話の時にアイムはこういう格好の人に誘拐されている。

「ゆ、誘拐犯ですか！？」

今まで以上の誤解。

「え！？そういう誤解ですか！？僕は、レムレスです…。」

「あ、すみません。寸止めをする筈だったのですが…。」

と、下を向いた。レムレスは

「いえ、僕も行き成り話しかけてごめんなさい。お詫びに…お菓子を貰っていくれますか？」

アイムは受け取った

「はい、ありがとうございます。あの、良かったらぶよ勝負してくださいますか？私達、大いなる力について情報を探しているんです。私が勝ったらで良いので、教えてくださいますか？」

「やりますよ。」

その影から実は黒いワンピースを着た女の子が見ていた。

「先輩と一緒にいる。あの人、呪われればイ・イ・ノ・ニ」

何かを狙っている様子。そして、それに気付かず、ぶよ勝負を始めた2人。4手先で勝負をすることにした。レムレスは3連鎖。アイムも3連鎖。初めてにしては互角である。レムレスは5連鎖をした。アイムは7連鎖。アイムが勝った。

「楽しかったです。ありがとうございます。それで…大いなる力って、この世界にあるのでしょうか。」

「この世界には何人か力の強い人が集まっているので、そのなかの誰かが持っていると思いますよ。」

「分かりました。ありがとうございます。」

レムレスとアイムは分かれ、ガレオンに情報を持ち帰ろうとしたときだった。

「マ・チ・ナ・サ・イ」

さっきの少女がアームを呼び止めた。

「彼方はどちら様でしょう？」

「それはどうでもいいわ。あなた、私と、ぶよ勝負をしなさい」

アームはどんなんでいるのか分からないまま、その少女とぶよ勝負をすることにした。ぶよぶよフィーバーで戦うことに。フェーリは、3連鎖、アームは3連鎖で反撃し、フィーバーゲージがたまった。次に4連鎖、アームは5連鎖で反撃し、フィーバーとなった。連鎖の種を消して、一気に勝負を付けた。

「一体、何を誤解していたのですか？」

「つ、次は負けないから！」

人の話を聞かないで去った。レムレスからの情報をマーベラスに知らせた。

「力の強い奴…か。次は俺が出てくる。」

「なら、私も。」

マーベラスとアームが町に出た。

4：大いなる力の情報がはじめて入った！（後書き）

と、いうことでレムレスが登場！

あと…、この話の始まり（？）の小説を投稿しました！そちらも読んでくださいね！

5：大いなる持ち主をみつけたけど…。

マーベラスとアイムは町外れにあるサタン城を見た。はつきり言うて、趣味が悪い。

「あら、貴方たちは最近この街にやってきたという人たちかしら？」

「そうです。私はアイム・ド・ファミーユ。この世界に大いなる力があると聞いたので、どんな人なのか、探しに来たのです。」

「そ…、そうね…。私はルルー。あの方なら知っていると思うから、案内してあげるわ。ただし、私にぶよ勝負で勝ったらだけど。この格闘女王に勝てる相手なんて早々いませんものね、おーっほっほー!!」

いかにも女王様キャラ。しかし…。なにか隠しているように思えた。マーベラスがその格闘女王に挑む。種目はブロック。フィールド上にブロックが置いてあり、思ったとおりに連鎖ができないことがあるのである。格闘女王の名が廃らないほどの力を持つルルー。4連鎖に対して、マーベラスは5連鎖。

「やればできるものなんだな。おもしれえ。」

マーベラスも本気モードに突入。7連鎖だ。ルルーは3連鎖。反撃できずに、マーベラスの勝ち。ルルーは、サタンのところへ案内してくれた。

「サタン様、お客様がお出でです。」

お色気。めっちゃやばい。

「そうか。私の名はサタン様だ。何のようだ？」

「あの…。この街に大いなる力があると聞いたので、探しに来たのですが…。さっきのルルーさんの言動にちょっと疑問を持ちまして…。サタンさん、貴方が大いなる力をお持ちなのではないでしょうか？」

ルルーは驚いた。ちょっとしたミスだけでそれを見抜けるのだから。「お前らに大いなる力を渡す気はない。さっさと永遠のぶよ地獄へ落ちろ！」

「お待ちください、サタン様！」

ルルーが止めた。

「サタン様、私があの時ミスをしたのが悪いのです！だから、私をぶよ地獄へ落としてください！！！」

するとサタンは、何も聞いていなかったかのように、アイムとマーベラスをぶよ地獄へと落とした。ル

ルーは、どうもおかしいと思った。返事もなくぶよ地獄へ落とした。このことをアルルに伝えるために、ルルーは街に走っていった。

6：何かが違う!!

街へ走っていくと、ドラコこと、ドラコケンタウロスを発見。

「ドラコ！アルルはどこかしら？」

ドラコは少し考えた。

「ん？海のほうに向かっていったけど？」

それを聞くと、ルルーは走って海に向かった。ぷよ地獄に、マーベラスとアィムが落とされたことを知らせにいかねければいけない。ルルーは全速力で走った。それを見ていたシエゾは…。

「怖っ！」

一方そのころ、ぷよ地獄に落ちた2人は。

「マーベラスさん、大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかな。あいつが大いなる力を持っていることはわかった。」

マーベラスは上を見た。空というよりも、赤ぷよの塊。マーベラスはここから出るため、歩き始めた。アィムもそれについていく。

地上では、ルルーがアルルを見つけたようだ。

「アルル!!」

「ルルー、如何したの!？」

「それが…」

さっきあったことを全て話した。サタン城の前でマーベラスを見て、サタンにあわせて、サタンがぶよ地獄に落としたことを。

「サタンが!？」

アルルは、サタン城へダッシュ!すると、サタン城は、趣味の悪い城から、幽霊屋敷のような、不気味な感じになっていた。

「サ、サタン様!？」

ルルーは驚きを隠せない。もしかすると、これは別のことが関わっているのかも知れない。アルルはそう思い、アミティのところと、りんごのところへ向かった。そのときは丁度、鎧も一緒だった。

「マ、マーベラスさんと、ア、アトムさんが!？」

「そうみたいなんだよ……。」

「エコロじゃないよ、これは……。多分、別物。」

りんごの予想は当たっていた。

「ないなあ。」

「あれ?クルークだ!」

「やあ、君達か。僕は今探し物で忙しいんだ。」

いつもの本を持っていない。一体如何したのか。いつもの本は、自宅においてあるらしいが、もう1つの本が2日前から行方不明らしい。

「何か封印とかされているの？」

「ああ、黒い怨念が封印されている。」

「それだああああ!」

サタン城へ皆でダツシュ!もしかしたら、真相はそこにあるかもしれない。

ぶよ地獄に落ちた2人は。

「マーベラスさん、あのぶよ、何かおかしくくないですか？」

「どういふことだ？」

「何か、他のと形が違う気がしますし、鍵穴がついています。」

アイムは目がよかった。

「それを見つげちゃ、おしめえだ。こつからは、生きて返すわけにはいかねえな。」

正体は、もう1人のマ、マーベラス!?

「あなた方はここで終わってもらいます。」

もう1人のアイム!?

「お、俺が2人…か？」

「私も2人います。」

波乱の戦い、スタート。

6：何が違う！！（後書き）

後もう少しで終わります！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2078ba/>

プリンプタウンに飛ばされた海賊たち

2012年1月14日08時46分発行